

北東アジア地域における環境協力とエコ雁行型モデルの可能性

龍 世 祥 (金沢星稜大学)

アジア地域の環境問題を考える際に、人間、経済と統合した循環の視点が必要である。産業革命以降、現実の経済社会は悪循環側面の拡大が加速し、まさに悪循環社会となっていると判断される。悪循環社会は、基本的に途上国タイプと先進国タイプに分類できるが、アジア地域への投影として、当該地域における経済発展の格差、自然賦与の差異などの地域的特徴と同様に重層的に現れている。

それは環境問題の視点で端的に示すとすれば、先進国が今まで100年以上にわたって経験してきた歴史的農村型環境問題、産業公害型環境問題、都市・生活型環境問題、地球型環境問題が、現在の北東アジアでは、その全地域においても、或いは一国においても、同時に重層的に存在しているのである。

このような多層的な環境問題はその空間的広がり次第で次の3つの側面から把握できる。まず、①アジア地域は他の地域と同様に、温暖化、オゾン層破壊、資源の枯渇化などのような地球規模の環境問題の形成に荷担しながら、同時にそれらの被害をより深刻に被っている地域である。②この地域に共通の環境問題として、酸性雨を代表とする地域的大気汚染、森林減少にあらわれている自然生態系破壊、重油流出事件の発生によって注目される日本海と環日本海沿岸地域の海洋環境破壊などが挙げられる。もう一つの特別な問題は廃棄物の輸出問題である。また、③各国内で起きている問題として、ゴミの大量発生、交通の渋滞、騒音の増大などを中心とする都市型環境問題と、耕地の減少と劣化、河川汚染と用水不足、衛生と伝染病などのような農村型環境問題がある。

なお、素材的に考えると、自然環境問題に直接

に影響を与えるのは廃棄物問題と資源問題である。この場合、二酸化炭素排出とエネルギー消費、特にその格差構造が大きな論点となる。

アジア地域の環境問題の要因を考える際に、何より重要なことは、人間と人間との関係悪化により引き起こされた環境破壊問題である。それは、戦争、地域紛争、軍事防衛力の競争などがもたらした、人間そのものはもとより、自然環境、人間生活環境、経済発展への破壊、或いは、自然資源の浪費である。つまり、平和問題と環境問題とは表裏一体の問題であり、環境問題の最終的な解決は平和的社会の実現を前提としている。国際地域社会が政治的、民族的に不安定であれば、環境保全への努力は抑制されてしまうと同時に、その効果も簡単に相殺されてしまうのである。

その次は、自然破壊の主因として当該地域の人口成長率と経済成長率が高いことが考えられる。これは、アジア地域において主に「成長型雁行モデルの普及」と「圧縮型工業化・都市化の進行」との二つの側面から特化されている。すなわち、戦後、「高度成長モデル」が日本により、欧米からアジア地域に導入された。70代から日本を初めとして、この「高度成長モデル」の東南アジアへの普及により、1つのアジア特有の「成長型雁行モデル」が形成された。特に社会主義国の改革・開放路線の実行から、冷戦構造の崩壊を経て、この「成長型雁行モデル」はさらに中国の南方から北方へそしてロシアの沿海地域へと急速に波及していった。1990年代の後半に入り、金融危機をはじめとする経済不況がこの地域にも現れたが、このモデルそのものは崩壊せず機能し続けている。そして、それはさらに21世紀においても維持、拡

大され、アジア地域を再度「成長センター」の軌道に押し上げる状況が進んでいる。その結果として、アジア地域においては工業化と都市化が一举に現れるいわば「圧縮型」の形で実現されている。この「成長型雁行モデル」の普及に伴って急速な進展をみせてきた「圧縮型都市化・工業化」は、同時に環境問題にも複合的な特徴を付ける基本的な要因となった。

アジア地域に展開されている悪循環構造の脱却を目指す冷戦構造の溶解、環境意識の向上と環境産業の拡大などの動向、特に、「成長型雁行モデル」に対抗する多次元、多分野の環境協力（略）は、地域経済システムエコ化に向けて多方向のアプローチの道程を開いている。その各方向の途中には様々の具体的な課題も明らかに顕在化している。そのポイントは、悪循環構造から脱却するには、その基本的形成要因である「不信構造」と「成長型雁行モデル」から脱却して、その転換機能をもつ装置を創出して、既存のモデルに据え付けて、機能させることが必要である。それを「エコ型雁行モデル」と言うことにしたい。

ここで言う「エコ」という言葉は勿論、自然環境視点を強調する意味で付けられたのである。ところが、前に説明したように環境破壊の最大の要因が戦争と軍事競争であるという意味で、その「エコ」という言葉には自然生態系の「共生」と「多様性」だけではなく、人間社会の「共生」と「多様性」を更に強調される。この名付けに使う「雁行」と言う言語には次の4つの意味がある。第1は、このモデルの現実的な出発点がさけることのできない「格差性」と、既に定着している「成長型雁行モデル」にあることである。第2は、環境負荷の側面では責任の歴史的と現実的な「格差構造」があり、その「格差」を活用するには一つの雁行型の「責任構造」が必要である。第3は、環境保存の側面では技術的に、経験的、資金的な（ソフトとハードの面）の「格差」構造があり、それを活用することである。第4は、経済面に存在す

る格差と環境の側面に存在する格差を同時に利用して環境協力を進められることもこのモデルに強調されることである。

「不信構造」の溶解装置に関しては、平和と安全保障に関わる問題として、国間レベルで、2つのポイントがある。一つは、歴史問題に対する政府レベルの認識的、言行的な清算である。もう一つは対米と対アジアの対称的構造の創立である。ところが、国レベルだけではこの2つの問題を近い将来に解決するのは期待できない。この場合、経済、特に環境分野で行われる①地方分権の推進による自治体間の交流の拡大、②民間レベルの他分野の交流の促進、NGOの交流の促進 ③地域知的資源の創出と活用、④環境分野での交流、協力の展開が有効な間接的アプローチとして期待される。

「成長型雁行モデル」を脱却する装置については、その均衡化装置とエコ化装置に分けて考える必要がある。均衡化装置に関しては、既に提唱された「技術集積構造」（関満博教授）と「生産知識体系」（金田一郎教授）の活用と「均衡発展モデル」（坂田幹男教授）、特に、本多健吉教授が早くも強調された、国際的、国内的周辺部における地方間の経済交流を促進させ、「垂直的国際分業」から「高度水平的国際分業」への移行と、地域間不均等発展是正を可能させるというグローバル化とリンクした「オープン・グローカリズム」のビジョンなどがこれに相当する構想であると考えられる。

さらに、これらの観点を参考して、このモデルを均衡化するには、新規産業の場合、その格差より分野的相互補完性が強くて、新しい協力型が生まれてくる可能性が十分にあると考えられる。例えば、IT革命は資本集約型から知識集約型へと一足飛びに産業構造の高度化を可能にするため、従来の日本→NIEs→ASEAN→中国という順で「雁行型」に経済が発展していく特有のパターンを崩す可能性がある。この意味でIT産業と同じ

性格を持っている国際観光産業、福祉産業、環境産業、知識産業などにおける協力が拡大していけば行くほど、そのモデルの均衡化が期待される。

この地域における多次元的环境協力構造がこの地域の「成長型雁行モデル」のエコ化装置として全体的に考えられるが、ここで強調したエコ化装置は「多次元的环境協力」と「多次元的经济協力」を融合させる機能を持っているものである。この融合傾向は北東アジア地域においてまだきわめて幼稚な存在であると言わざるを得ないが、これから成長していく可能性が十分にあると判断でき、戦略的、政策的に育成する必要性もある。そのビジョンとしては、次のように5点を示しておきたい。

①環境マネジメントの強化による直接投資の資本性格のエコ化

90年代に入ってから、国際的に、特に先進国においてはISO14001資格認定取得を中心とする環境マネジメントが推進、普及されつつある。つまり、産業資本には性格的に環境保全という機能が付加されつつある。ところが、従来の「成長型雁行モデル」に従っては、この性格は直接投資の場合に必ずしも付帯されていない。これから、この性格を持ちながら直接投資を行う国際投資資本のエコ化が「エコ型雁行モデル」の構築に期待される。

②環境産業分野の協力の展開による国際投資構造と国際貿易構造のエコ化

環境産業を新規成長産業として育成し、拡大させるのは、北東アジア地域の諸国においては産業政策に重点としておかれている。特に中日間では、既に新エネルギー装置、汚染防止装置などの面において、環境ビジネスを内容とする企業協力の事例がある。これから、この分野では雁行型の原理で協力の可能性が強い。環境産業の拡大に伴って、国際貿易構造の変化にも環境関連製品の貿易額は

規模的にみてまだ小さいが、伸び率が高いのは目立つ。環境産業協力の拡大を実現できれば、これから、その規模は更に拡大していくと判断される。

③都市・自治体間交流の強化による調和型循環地域づくりの国際的普及

国によって差があるが、地方分権が進んでいるとは言える。とくに日本の地方分権が実現できれば、他国の都市・自治体間の交流は実質的に展開していくのは確実なことである。そのなかで、最も期待されるのは日本における自然環境面の経験と教訓を生かした地域づくりの手法が対岸の都市と地域に普及されることである。

④環境NGO交流の拡大による国民環境意識の高度化

北東アジア地域においては、環境NGOの発展がもう一つ新動向である。NGOの大半、特に環境NGOは地球益を理念にして活動している。従って、勿論、資金の面の課題があるが、協力関係を作るのは他の主体間よりしやすいと思われる。特に、NGOの交流は基本的に国民レベルで展開されるので、国民の環境意識の向上には一番効果的であると考えられる。

⑤日中韓を核とする多国間実施型協力構造の構築

米国の離脱宣言から見られた「京都議定書」の難航がわれわれに貴重な教訓も提供された。つまり、地域経済システムエコ化に向かってアプローチする過程には、地域の視座に立ってみれば、国際合意から発効へと前進する一つの方向より、先に言及していた、地域的協議型の協力の具体化と、実施型の協力を民間から都市間からへと、そして自治体間から2国間への拡大化との接点を見つけて、地域全体の実施型協力の母体を創出するという方向は、現実的、効率的なのであろう。アジア地域に应用すれば、すでにスタートしている日中韓三か国環境協力はそれとなりつつあると判断される。

COMMENT

桂木 健次 (富山大学)

従来のアジア開発論が「キャッチアップ型（圧縮型）工業化」と「国」単位の競争優位を旨としていたことは否めないし、また10年前の当初は、日本海をつないで交流と交易を求める「経済圏」としても、こうした国相互のブロック化に規定される面を定立しようとした動向も無視し得ない。しかし、「環日本海地域」として呼称される概念には、冷戦後を期して日本海に足軸を延ばし、朝鮮半島全域・ロシア極東部・中国東北三省（と華中沿岸部）との新たな地域秩序が展望されてきた。

顧みると、日本のみならず、対岸諸国においても、この日本海地域は、「周辺部的」として扱われ、それゆえに相対的に社会的・経済的開発も遅れ、関東・関西地域への電力供給のための原発が日本における柏崎・若狭に立地され、またロシアにおいては沿海州沿岸と日本海沖への原潜廃炉などの放射性廃棄物投棄が押し付けられている。一方で、経済成長と社会開発から取り残されて、また、韓国南東部の蔚山・温山工業団地のように、発展の中心部から外された公害企業が過去に立地されたりして、環境面を含めてさまざまな問題が起きてきた。こうした国レベルでの施策の枠組みを打破しようとした動きは過去にもあった。日本では、第一次全国総合開発計画と相応した1960年代の富山・高岡地区新産業都市開発計画等の拠点開発として、社会経済開発の足軸を対岸諸国において構想したのであったが、それは時代が許さなかった。

1990年代にして漸く、そうした「日本海の時代到来」を語れるようになり、「日本海」という地名呼称の是非を含めて、歴史的過去と社会体制の異なる共生的関係を求め、国境を跨いだ関係性をアプローチする展望が出てきた。

そして、地方政府・自治体間の社会経済的交流秩序の形成を目指して、この地域への先行的な公

的投資と私的資本の進出を呼び込む動きも出てきた。それは、経済統合圏の構築をなすには至らなかったものの、この地域は、世界に残された最後とも言える巨大な未開拓市場でもある。しかし、その生産と消費の水準が先進国のレベルにキャッチアップするということは、巨大な資源・エネルギー消費と汚染物質の排出、環境への負荷発生を意味する。現在の経済成長を持続すれば、2020—2030年頃には、その中核をなす中国だけでもCO₂排出量は現在の米国のレベルに達すると見られる。このことによって、この地域が抱える環境問題の課題は、個々の国や地方の枠を超えて外延して行く。

これから21世紀の初頭は、アメリカ国家(普遍主義と対抗する基軸の側に中国とロシアの国家主権が立つことが想定され、そのはざ間に北東アジアの地域協力対応がどう安定的な秩序を構築できるかが問われる。日本側は、自らが属するその地域協力の秩序を構成するパートナーシップとして、対岸諸国との新しい枠組みを提起して行く必要がある。それは、中国西部大開発での環境的安定を支援し、中央アジア・東シベリアの資源開発、朝鮮北部の開発開放、ロシア極東部の開発から軍備管理を含めた核廃棄物管理に至る包括的な環境協力の内容を問われる。

これからの環日本海地域が協働で取り組むべき共通の環境問題では、地球市民レベルの解決を図るとともに、生活レベルでの環境負荷の小さな地域づくりが必要である。そのためにも、国境を越えた政府（とくに地方自治体）・NGO・企業などのパートナーシップのあり方が問われている。日本・韓国・中国などの市民セクターと自治体との協働による持続可能な日本海を取り巻く地域圏の社会環境の構築をめざすためのラウンドテーブルづくりを進める必要がある。そして、その奔りは

眼前にみることが出来る。報告者は、これを「エコ雁行型経済成長モデル」と命名し、その産業展

開の展望を試論的に提起した。これからの研究を期待したい。